

月を見上げて

ちば のぞみ
千葉 望

今

年の新暦七月七日、夜一時過ぎにタクシーで帰宅途中だった私は、空の明るさに思わず目をこらした。山手線の高架橋上を走る車の窓から、白銀色に輝く雲が見えている。ああ、満月——この日、新暦の七夕とあって、笹飾りに願い事を託した短冊を下げた子どもたちも多かったはずだ。だがこの明るさでは、天の川は見えようがない。

そもそも、七夕の日に満月が巡ってくるというのが間違いなのである。陰暦の七夕なら月はほぼ半月（上弦）。しかも夜一〇時ともなれば沈んでしまうので、空にあるのは星だけとなる。晴れてさえいれば、そしてネオンやスモッグに邪魔されない土地であれば、白く煙る川のような天の川が眺められるだろう。だが新暦ではそれもむずかしい。梅雨の真っ最中では晴れることが少なく、今年のように

に満月に重なれば、晴れたところで月の明かりがあえかな星の光を隠してしまう。七夕とは陰暦だからこそ生きている行事なのである。私はすべての年中行事を陰暦でやるべきだと考えているわけではないが、太陽の動きに合わせて作られた陽暦（新暦）に、単純に置き換えるのでは意味がないとも思う。

人は古来、太陽の動きや月の満ち欠けとともに生きてきた。陰暦一月一日は月がないか、新月であり、一五日前後に満月となる。晦日にはまた月がなくなる。それを肉体の一部に取り込んで暮らしてきたのである。年中行事の多くは、月のリズムとともにあった。

が一月一五日に定められていたのは数年前までのこと。最近では経済効果をねらい、一年最初の三連休を作るとかで、成人の日は年によって違うありさまである。謂れを知らないのだから、しきたりを大切にすることはできない。

もうじきやってくる七五三の行事も、陰暦一月一五日の満月前後に行われることが多かった。子どもたちの節目を祝う日を、月もことほぐ。空を照らす満月とは、それほど大きな意味があったのだ。現代に生きる私たちの体は自然のリズムを失いかけている。空を見上げることが減多にないという人も多からう。だが、都会でも月は見える。毎日月を見ることを習慣にすれば、太古から受け継いできたリズムがきつと体内に甦る。私はそう信じているのである。

1 エッセイ 世界へ●世界から
月を見上げて
千葉 望

2 特集
ヨーロッパのパン

パンにこもるヨーロッパの意思
…… 舟田 詠子
町の暮らしに根づくイタリアのパン屋さん
…… 宇田川 妙子
ドイツのパン フロートとプレート
…… 森 明子
パンと塩の儀礼
…… 新免 光比呂
パンではない菓子パン フィンランドのパン文化
…… 庄司 博史

8 モノグラフ
傾く椅子
一脚二役 早変わり
近藤 雅樹

10 地球ミュージアム紀行
ヨーグルト博物館
伝統食品から地域の振興をはかる
マリア・ヨトヴァ

11 表紙モノ語り
代親布
深谷 志寿

12 みんぱくインフォメーション

14 万国津々浦々
同窓会ラッシュのインドネシア
阿良田 麻里子

15 時論 新論 理想論
余は如何にしてカヴァオロジストとなりしか
丹羽 典生

16 多文化をささえる人びと
小さな善意から生まれる可能性
「中国帰国者」を支援する山本慶一さん
南 誠

18 生きもの博物館
世界最大の二枚貝(シャコガイ)
印東 道子

20 歳時世相篇
サムハラガン
雨季のインドの「集団結婚式」
上羽 陽子

22 フィールドで考える
ペルー共和国、ワラルの「テンブラ」と桜
浅見 恵理

24 みんぱくウィークエンド・サロン
研究者と話そう
次号予告・編集後記

岩手県生まれ。早稲田大学文学部日本文学専修卒業。ノンフィクション・ライター。著書に『21世紀への手紙』(文春新書)『実践する! 仏教』(すばる舎)『古いものに恋をして。骨董屋の女主人たち』『古いものに恋をして。「好き」を生きている女性たち』(里文出版)『陰暦暮らし』(ランダムハウス講談社)などがある。